グループワークにおける「他者志向性ペア活動」による自閉性障害児のコミュニケーション行動の変化

横　田　晋　務*
和　田　美　穂**
滝　吉　美知香***
田　中　真　理****

本研究では、他者への関心に希薄さを示す自閉性障害の男児1名（12歳3ヶ月）に対し、少人数のグループワークにおいて、他者への志向性を高めることをねらいとした2人1組の活動（「他者志向性ペア活動」）を設定し、対象児のコミュニケーション行動の変容を検討することを目的とした。コミュニケーション行動の分析にあたっては、生起した対象児の行動をコミュニケーションの相手（ペア／非ペア）別に、志向性の有無と手段（身体的／言語的）という2つの視点から分類し、生起頻度の変化を検討した。その結果、志向性に関しては、対ペア相手のみならず非ペア相手に対しても志向性が高まったことが示された。手段に関しては、対ペア相手でのみ言語的なコミュニケーション行動の生起頻度が増加した。以上より、「他者志向性ペア活動」が対象児の志向性を促すために有効であったことが示唆された。

キーワード：自閉性障害　グループワーク　コミュニケーション行動　志向性

Ⅰ．問題と目的

自閉性障害は、「社会的相互交渉の質的障害」、「言語と非言語性コミュニケーション機能の質的障害」、「行動や関心および活動の限局的、反復的、常同敵なパターン」の3つ組障害といわれる症状で定義される自閉症スペクトラム障害（Autistic Spectrum Disorder：以下、ASD）（Wing &Gould, 1979）に含まれる障害の1群である。このような自閉症スペクトラム障害児を対象とした対人的支援の形態的な側面としては、1980年代以降、それまで主流であった個別指導からグループワークが実施されるようになった。これらの対人的支援の目的としては、社会的スキルの獲得や情動の活性化などが挙げられる（例えば、岡田・後藤・上野, 2005；高原, 2002；井澤, 2000；涌井, 2003；田中・滝吉, 2005など）。

グループワークにおいて社会的スキルの獲得を目指した実践として、岡田ら（2005）は、6名の軽度発達障害児（学習障害：以下LD、注意欠陥／多動性障害：以下AD／HD、アスペルガー障害児：

*教育学研究科　博士課程後期
**茨城県立北茨城養護学校　教諭
***教育学研究科　博士課程後期／日本学術振興会特別研究員
****教育学研究科　准教授

以下 AS）に対して、ゲームを取り入れたソーシャルスキルの指導を行った。協調的に仲間と関わることを目的として1年間のグループワークを行った結果、LD 児や AD ／ HD 児では、自由遊び場面において協調的な働きかけが増加し攻撃的な働きかけが減少するといった変化が認められ、保護者に対して行われた子どもの社会的スキル評価も上昇がみられた。一方、AS 児に関しては、自分の気持ちをうまく表現できずに行動したり、働きかけに対して反応しないといった消極的行動が一貫して多く、社会的スキル評価も変化がみられなかった。これに対し、岡田ら（2005）は、AS 児は「仲間に協調的に関わること」自体への関心が低く、ソーシャルスキルに対する動機付けが低かったことが改善しなかった原因であると結論づけている。

このように、ASD に包含されるアスペルガー障害児に対しては、ソーシャルスキルの獲得を目指し、スキルそのものを教え込んでも日常場面への応用などは難しい。同様に自閉症スペクトラム障害に位置づけられる自閉性障害児に対しても、このような傾向がみられることが予想される。したがって、必要とされるスキルを教えるのではなく、その基礎となる他者と関わる動機付けや志向性そのものを高めるアプローチが必要となるだろう。

他者への志向性を高めるためには、他者を認識しやすい状況を設定することが重要であると考えられる。そのためのアプローチとしては、少人数でのグループワークが挙げられる。井澤（2000）は、発達障害児2名とセラピスト2名の集団において、ゲームスキルの獲得と直接指導していない社会的行動の生起頻度を検討した結果、ゲームスキルの獲得に伴い、社会的行動も自発生起したことを示している。少人数のグループワークでは、構成メンバーが少人数でかつ固定されているため、他者に関心が向きづらく、様々な刺激によって注意がそれてしまうような傾向のある子どもでも、認識する対象が少ないために、比較的、同集団を構成する他児を認識しやすくなり、他児との相互交渉が促進しやすいと考えられる。

しかし、前述した岡田ら（2005）もグループサイズとしては少人数といえるにもかかわらず、AS 児に対しては不適応状態に明確な改善がみられなかったことを考えると、単純に少人数という環境を設定するだけでは動機付けの低さに対して十分にアプローチできていないだろう。この点に関して、涌井（2003）は、2人1組のペアを作り、ペア単位で強化を与えることにより、ゲームで勝利したときに喜び合うといったような共感的なやりとりの文脈が生み出されると述べており、ペアでの活動により志向すべき相手が明確である状況が共感的やりとりを促したと考えられる。

そこで、本研究では、少人数グループの中で、志向する他者を1人に限定することで、ASD 児がより他者へ志向しやすい環境を設定したうえで、ASD 児のコミュニケーション行動を促進するための活動を行う。この活動を「他者志向性ペア活動」と定義づける。2人1組とより規模を限定した理由は、少人数のグループ内であっても子どもによっては特定の他児に意識を向けることが困難であったり、あえてそのような行動をとらない場合があるためである。

さらに、ASD 児の他者への志向を促すためには、「他者志向性ペア活動」において子どもの状態像や志向性のレベルに合わせ、「他者志向性ペア活動」で行う内容を変化させていく必要があるだろう。特に ASD の中でも受動群（ウィング，1988）に属する者は、他人を避けることはないものの、自

発的な人との交わりを始めることはなく、自発的に他者を志向すること、コミュニケーション行動を表出することに少なさを示す。したがって、他者への志向性を高め、言語的コミュニケーションを増やすことにより、コミュニケーション行動を多様化させることが必要であると考えられる。このような状態像を踏まえ、本研究では、「他者志向性ペア活動」において行う内容を以下の3つのレベルに設定した。すなわち、対人的距離が近くペア相手を認識しやすい、身体的なコミュニケーション行動を行うレベルの活動（活動Ⅰ）、対人的距離が遠く、身体的、言語的両方のコミュニケーション行動を行うレベル活動（活動Ⅱ）、および対人的距離が遠く、言語的なコミュニケーション行動を行うレベルの活動（活動Ⅲ）を設定する。このように設定した理由は以下の2点である。1点目は、他者へ志向しにくかったり、したとしても適切に文脈を読み取ることに困難のある子どもたちには、物理的な距離の近さが他者を志向する上で重要となると考えられるからである。2点目は、言語的なコミュニケーションに比べて、身体的なコミュニケーションは目に見えやすく、他者からの働きかけを認識しやすいと考えられるためである。これら2点を踏まえると、活動Ⅰはもっとも他者を志向しやすく、働きかけを認識しやすい活動であり、活動Ⅱ、Ⅲへと移行するにつれて志向しにくく、認識しにくくなると考えられる。

以上を踏まえ、本研究では、受動群に属するASD児を対象に、「他者志向性ペア活動」において、ペア相手の認識のしやすさに応じて活動レベルを設定することにより、ASD児のコミュニケーション行動がどのように変化していくのかという点を明らかにすることを目的とする。

本研究の仮説としては以下の2点が挙げられる。1つには、「他者志向性ペア活動」を行うことにより、ペア相手に対する志向性が高まるということである。さらに、志向する相手を認識しやすい構造において活動を行うことにより、対象児が他者を志向しやすくなり、ペア相手のみならず、ペアを組んでいない他者（非ペア相手）への志向性も高まると考えられる。

2つには、言語的コミュニケーション行動が必要とされる活動を行うことにより、ペア相手に対する言語的コミュニケーション行動のみならず、非ペア相手に対する言語的コミュニケーション行動の生起頻度も増加すると考えられる。

以上の仮説を検証するために、本研究では、ASD児のコミュニケーション行動を、対象となる相手別（ペア／非ペア）に、他者への志向性の有無、コミュニケーション行動の手段（身体的／言語的）から捉え、その生起頻度の変容を検討する。

Ⅱ．方法

1．対象児

⑴生育歴及び本研究開始時の状態像

T大学発達相談グループワークに来談する高機能自閉症児1名（以下、A）とする。

A児は、本研究開始時において12歳3ヶ月の男児で、WISC-Ⅲによる知的水準はVIQ80、PIQ62、FIQ68である。家族構成は、父親、母親、本人、A児と同じ小学校の通常学級に在籍する3歳年下の妹の4人家族である。4歳時に、幼児相談室にて、自閉性障害の診断を受けた。その後、医

療機関にて、高機能自閉症の診断を受けた。9歳時に、T大学の発達相談に来談した。

状態像としては、温厚で他者からの指示に対して一生懸命行おうとする面がみられるが、積極的に他者と関わろうとする様子はあまりみられない。言語による表出に時間がかかり、自発的に言語的コミュニケーションを行うことも少ない。また、自分の興味がひかれる対象(もの・言葉)があると、そちらに注意が向いてしまう。これらの状態像から、A児は、ウィング(1988)が自閉性障害を社会的相互交渉の障害の様相に応じて4つに下位分類した中での“受動群”であると考えられた。

⑵他児、およびスタッフの概要

観察場面には、A児の他に、T大学発達相談グループワークに来談する中・軽度の発達障害児5名(自閉性障害児3名、過去に高機能広汎性発達障害と受けたが現在特定の診断名なし1名、自閉性障害児1名)と、その兄弟児2名が参加した。対象児および他児のプロフィールをTable 1に示す。

スタッフは、T大学教育学部において、障害児教育を専攻する学生5名であった。5名のスタッフのうち1名がセッションにおいて「ディレクター」と呼ばれる、セッション全体の活動の進行に関わる指示を与える進行役を務めた。他4名は、対象児、他児とともに、セッションに参加しながら、適宜活動の見本となり、子どもの活動内容の理解をフォローする役割をとった。なお、「ディレクター」は、固定化したスタッフが行うのではなく5名がセッションごとに交代で行った。

Table1　対象児および他児のプロフィール

	性別	CA(学年)	所　属	診断名	WISC-Ⅲ(VIQ/PIQ/FIQ)
A児	男	12:3(小6)	公立小学校特別支援学級	自閉性障害	80／62／68
B児	男	9:10(小4)	公立小学校特別支援学級	高機能自閉性障害	92／92／91
C児	男	10:9(小5)	公立小学校特別支援学級	自閉性障害	61／62／57
D児	男	11:2(小5)	公立小学校通常学級	診断名なし	72／83／75
E児	男	12:3(小6)	公立小学校特別支援学級	高機能自閉性障害	72／73／70
F児	男	12:3(小6)	公立小学校特別支援学級	高機能自閉性障害	84／129／106
G児	女	(小3)	公立小学校通常学級	A児のきょうだい児	
H児	男	(小3)	公立小学校通常学級	D児のきょうだい児	

2.　観察の概要

⑴発達相談グループワークの概要

月2回、各60分行われた。このグループワークにおける目的は以下の4点である。

(i)楽しさを伴う身体活動により、言語表出を促す

(ii)他者への意図や気持ち、特性への興味・関心を促す

(iii)言葉や身体を通じて、自分の意図や気持ちを他者に伝える

(iv)子ども自身が遊びの内容を決定し、場を動かす体験をする

上記4つの目的を達成するために、各セッションではスタッフが考案した2つの活動(活動①、②)

を20分ずつ行った。活動①では、グループワークへの意欲を高め、グループの一体感を感じられるような活動（全員でいくつかのブロックの上に乗り、ブロックが少なくなっていく中、お互いに助け合いながら落ちないようにする活動など）を行ない、活動②では、他者への志向を促すことを目的とした活動（足を結び、だるまさんがころんだをする活動など）を行なった。

⑵観察期間

200X 年1月15日から200X 年7月16日までに行われた計12セッション（＃1～＃12）とした。

⑶観察場面

グループワークで行われた上記の活動②における「他者志向性ペア活動」とする。本研究では、「他者志向性ペア活動」を「二人一組で行われ、相手と協調性を持つことで成立する活動」と定義する。「他者志向性ペア活動」は、ペア相手との対人的距離の近さと用いられるコミュニケーション手段（身体的／言語的）によって、大きく活動Ⅰ、活動Ⅱ、活動Ⅲの3つにわけられ、各4セッションずつ行った。

前述のように、A 児は積極的に他者と関わろうとすることが少ないため、A 児が志向しやすい距離や目に見えやすい形でペア相手を認識できるような活動を行い、対人的距離を徐々に遠くしていくこと、コミュニケーション手段は、認識しやすい身体的な手段（引っ張る、同じように動くなど）から徐々に言語的な手段（指示を伝える、紹介するなど）へと移行させていくことが重要であると考えられた。そこで、活動Ⅰは、ペア相手との対人的距離が比較的近く、相手を認識しやすい活動であり、身体的なコミュニケーション行動を使用する活動を設定し、活動Ⅱは、活動Ⅰよりは対人的距離が遠く、身体＋言語的コミュニケーション行動を使用する活動を設定した。そして、活動Ⅲは、ペア相手との対人的距離は活動Ⅱと同程度であるが、言語的コミュニケーション行動のみを使用する活動である。各活動の具体例を Table 2に示す。

⑷記録

プレイルーム内に設置してあるビデオカメラにより録画した。なお、ビデオ撮影に関しては、撮影の目的、プライバシーの保護を説明の上、対象児および他児の保護者に事前に承諾を得て行なった。

3.　分析

⑴分析対象

ディレクターが「他者志向性ペア活動」の始まりを告げた時点から、「他者志向性ペア活動」の終わりを告げた時点までとした。得られた画像データは、分析に際し、A 児のコミュニケーション行動をトランスクリプトした。

Table 2 各セッションの活動の具体例

レベル	#	ゲーム名	内容
活動Ⅰ 対人的距離：近 手段：身体的	1	足つなぎだるまさんがころんだゲーム	2人の足を1本づつ手ぬぐいで結んでだるまさんがころんだを行う。
	2	足つなぎだるまさんがころんだゲーム	2人の足を2本づつ手ぬぐいで結んでだるまさんがころんだを行う。
	3	ボール運びゲーム	2人で段ボール紙を持ち、その上にボールをのせて、落とさないように運ぶ。
	4	お尻でブロック運びゲーム	2人で背中合わせに立ち、お尻の間にブロックを挟み、落とさないように運ぶ。
活動Ⅱ 対人的距離：遠 身体＋言語的	5	目隠しボール運びゲーム	1人が誘導係となり、1人が目隠しをし、誘導係の指示に従ってボールプールまで行き容器にボールを入れて持って帰ってくる。
	6	目隠しボール運びゲーム	1人が誘導係となり、2人が目隠しをし、誘導係の指示に従ってボールプールまで行き容器にボールを入れて持って帰ってくる。
	7	お話しているのは誰だゲーム	1人がお母さん役、もう1人が誰かの役(母親、八百屋など)となり、みんなが正解できるように会話をする。
	8	あの子どんな子ゲーム	1人1つのブロックの上に立つ。ペアとなった相手の質問を聞き、答えを考えついたら、他のメンバーのブロックにのせてもらいながら、相手のブロックまで行き、答えを言う。
活動Ⅲ 対人的距離：遠 言語的	9	お友達推理ゲーム	自分用・ペア相手用の2枚の紙が配られる。その紙の空欄を埋める。(○君のすきなものは△です。など)書き終えたら、自分と相手が書いたものが一致するかを見る。
	10	何になるかなゲーム	ランダムなまるがたくさん書いてある紙を用意する。1人が誘導係、1人がシールを持ち、ディレクターがシール係に分からないように誘導係に場所を教え、誘導係がそのまるにシールを貼ることができるように指示する。
	11	書いたの誰だゲーム	相手の名前が書いた紙が配られる。紙には「○君はどんな子？・理由」と書いてあり、その空欄を埋める。書き終えたら、誰が書いたかをあてる。
	12	紹介ゲーム	ペアとなった相手と前に出てきて、相手の紹介を5つする。

⑵分析方法

VTR から作成した逐語録は以下のように分析を行った。

①コミュニケーション行動の志向対象

A 児のコミュニケーション行動の志向する対象による違いを検討するため、「他者志向性ペア活動」におけるコミュニケーション行動を、ペア相手に行なったもの（ペア群）と、他児に対して行ったもの（非ペア群）に分類する。

②コミュニケーション行動の手段

A 児のコミュニケーション行動の手段における活動レベル間での変容を検討するため、「言語的」「身体的」に分類する。

③他者志向性の程度

活動レベルによる、A 児の志向性の変化を検討するため、姜（1999）をもとに新たに作成したカテゴリーを用いて A 児のコミュニケーション行動を「志向性あり」「志向性なし」の2つに分類す

る。

②、③における分析指標をTable 3に示す。以上のように分類した上で、活動レベルごと（活動Ⅰ、活動Ⅱ、活動Ⅲ）にA児のコミュニケーション行動の生起頻度の差をχ^2検定によって検討した。

(3)信頼性の評定

全コミュニケーション行動の約30％にあたる275の行動をランダムに抽出し、2名の評定者が分類を行った。その結果、評定者間の信頼性は、κ =.83が得られ、十分な信頼性が確保された。なお、評定者間で不一致であった行動については、合議の上で決定した。

Ⅲ．結果

(1)ペア相手に対するコミュニケーション行動

他者志向性ペア活動における活動レベルの違いが、ペア相手に対するコミュニケーション行動の手段にどのような変化をもたらすかを検討するため、活動中に生起したA児のコミュニケーション行動を、言語的／身体的の2つに分類し、χ^2検定を行った。その結果、0.1％水準で有意な関連が認められ（$\chi^2(2)=25.5$, $p<.001$）、残差分析の結果、活動Ⅰでは、身体的コミュニケーション行動が

Table 3　分析指標

	志向性	カテゴリー	定　　義
身体的カテゴリー	なし	反応なし	他者からの働きかけに対して反応を示さないこと
	あり	行動的受諾	相手の提案・要求・命令に対して行動で受け入れること
		行動的拒否	相手の提案・要求・命令に対して別の行動をすることで拒否を示すこと
		行動的働きかけⅠ	視線を向けたり、笑いかけるなど関わりを示すこと
		行動的働きかけⅡ	肩をつかんだり、たたくなど身体的に関わりを示すこと
言語的カテゴリー	なし	相手に志向しない非提案的表現	自分の興味に偏った一人言や笑い
	あり	単純な受諾	相手の提案・要求・命令に対して単純に受け入れること
		単純な拒否	相手の提案・要求・命令に対して単純に拒否すること
		相手に志向した非提案的表現	他者の行動に対する自分の興味にそった発言
		意見の主張	自分の意志・意見の表現
		情報の提供	遊びや、物、人、状況について説明する発言
		発展的な受諾	相手の提案・要求・命令に対して展開につながる受け入れ方をすること
		代替案を提示した拒否	相手の提案・要求・命令に対して理由・代替案・妥協案を提示することによって拒否すること
		適切な答え	相手の質問に対して悩んだり、適切に答えること
		意見・情報の要求	相手から意見・意図や情報を尋ねる表現
		強い要求・命令	相手に対して強い要求・命令・禁止を示す表現

期待値より有意に多く、活動Ⅱ、Ⅲでは言語的コミュニケーション行動が期待値より有意に多い結果が得られた（Table 4）。

A 児のコミュニケーション行動における志向性と活動レベルとの関連を検討するため、A 児の全コミュニケーション行動を志向性の有無によって分類し、χ^2検定を行った。その結果、5%水準で有意な関連が認められ（$\chi^2(2)=8.8,\ p<.05$）、残差分析の結果、活動Ⅰでは志向性なしに分類されるコミュニケーション行動が期待値よりも有意に多く、活動Ⅲでは志向性ありに分類されるコミュニケーション行動が期待値よりも有意に多いことが明らかとなった（Table 4）。また、各活動にお

Table 4　対ペア相手における活動と手段、志向性の関連

		手段		志向性	
		言語的	身体的	無	有
活動Ⅰ	度数	1**	60**	12**	49**
	(%)	(1.6)	(98.4)	(19.7)	(80.3)
活動Ⅱ	度数	24*	48*	6	66
	(%)	(33.3)	(66.7)	(8.3)	(91.7)
活動Ⅲ	度数	17**	27**	1*	43*
	(%)	(38.6)	(61.4)	(2.3)	(97.7)
合計	度数	42	135	19	158

*：$p<.05$，**：$p<.01$

Table 5　A 児のコミュニケーション行動の具体例（対ペア相手）

手段	活動	志向性	エピソード
身体的	Ⅰ	無	メンバー全員立ってディレクターからゲームルールを聞き、ペアが発表される。ディレクターが「（さっき言った）2人1組になって座ってください」と指示を出す。しかし A 児はその場に立ったまま動かない。
		有	A 児と H 児がペアになって、足をつないでだるまさんがころんだゲームをしている。他のチームが前に移動を始めると、一緒に動く。止まって、みんながそろうのを待っていると、A 児は笑顔になって隣の H 児の肩をだきよせる。
	Ⅱ	無	目隠しボール運びゲームで、指示役の D 児が A 児に向かって「前に5歩」と指示をするが、A 児はその場から動かない。
		有	お話ししているのは誰だゲームで、ペア相手のスタッフが客の役をする。スタッフ「こないだ頼んでおいたものなんですけど・・・できてますか？」、店員役の A 児は「はい。」と手を動かし商品を渡すジャスチャーをする。
	Ⅲ	無	何になるかなゲームでペア相手の C 児が誘導係、A 児はシール係をする。C「こっちにしようよ」とシールを貼る場所を示すが、A 児は見ていない。
		有	A 児と G 児がペアになって紹介ゲームをしている。A 児は G 児に嫌いなものを紹介されると、「G のせいで恥かいちゃったじゃない！」と G 児を追いかけたたく。
言語的	Ⅰ	有	A 児と H 児がペアになってボール運びゲームをする。ボールを渡され、スタートすると、落とさないように運びながら「そいやさ、ぼーる」と繰返しながら進む。
	Ⅱ	有	床に座ってゲームの順番を待っている。B 児の投げたボールが A 児のおなかにあたる。何にも反応をしなかったが、しばらくたってから「あ、今雪あたった」と言う。
	Ⅲ	有	A 児とスタッフがペアになって何が出るかなゲームをしている。A 児が誘導係、スタッフがシール係である。A 児が「チョッパーの斜め上」と言った後、スタッフが「チョッパーの斜め上ってどっちだろう？」と聞くと「みぎ」と答える。

Table 6　対非ペア相手における活動と手段、志向性の関連

		手段		志向性	
		言語的	身体的	無	有
活動Ⅰ	度数	51	147	34	164
	(%)	(25.8)	(74.2)	(17.2)	(82.8)
活動Ⅱ	度数	84	260	53	291
	(%)	(24.4)	(75.6)	(15.4)	(84.6)
活動Ⅲ	度数	50	141	14**	177**
	(%)	(26.2)	(73.8)	(7.3)	(92.7)
合計	度数	185	548	101	632

*：$p<.05$，**：$p<.01$

Table 7　A 児のコミュニケーション行動の具体例（対非ペア相手）

手段	活動	志向性	エピソード
身体的	Ⅰ	無	A 児は G 児とペアになって足をつないでだるまさんがころんだゲームをしている。止まって待っていると、オニである B 児の投げたボールがおなかに当たる。スタッフが「いたかったね」と声をかけるが、答えない。
		有	スタッフと A 児がペアになって足をつないでだるまさんがころんだゲームをしている。隣にたっていた E 児が小さな声で鼻歌を歌う。それを聞くと、E 児の顔をみながら「ははは」と大きな声で笑う。
	Ⅱ	無	ディレクター「みんなわかったかな」の声に続いて、スタッフが「A 君わかった？」と聞くが、反応なし。
		有	G 児がかごをもって A 児のひざに座る。A「きゅうしょく？食べるの？」と言い、G 児が食べるふりをすると A「それパンのつもり？」と G 児の肩に顔をよせて笑う。G 児がぬいぐるみを A 児の口に近づけると顔をそむけ、G 児をだきかかえる。
	Ⅲ	無	紹介ゲームで、ペア相手の G 児から「おにいちゃんはやさいがきらいです」「おにいちゃんの弱点はアンパンマンの歌です」と言われると、A 児は G 児の頭をたたく。G 児は床に倒れこむ。A 児はじっと G 児の様子を見つめる。スタッフ「A 君言われたくなかった？」と言うが G 児を見つめていて答えない。ディレクター「A 君、言って欲しくなかったの？」と言うが A 児はなにも言わない。
		有	紹介ゲームで、ペア相手のスタッフ「A 君は朝パンを食べてきました」「A 君は・・・」と言いかけたときに、G「スーパーマン」という。A 児は G 児を見つめて「スーパーマンってうるさいんだけど」と顔を向けて小さな声で言う。
言語的	Ⅰ	無	D 児がブロックを投げたのをみて A「しかくい雪だ」と言って笑う。もう一度 D 児がブロックを投げると A「あ、しかくい雪だ！」とはっきりとした口調で言い笑う。
		有	A 児はボール運びゲームの順番をまっている。運んでいるチームを見ながら「ボール！ボール！」と掛け声をかける。A の掛け声に D 児が合わせて一緒に言うと、「まねしないで！」と顔をしかめて言う。
	Ⅱ	無	スタッフ「次は C ちゃんと F 君だ」と声をかけている中、A「とととととっとっと」と声を出す。隣にいた F 児が立ち上がると視線を向け、A「とととととっとととととっと」と歌いながら笑う。
		有	A 児は目隠しボール運びゲームで待機マットで順番を待っている。一緒に待っていた隣の H 児がボールをいじっているのを見て、「H 君てボール好きだ」と言って笑う。
	Ⅲ	無	A 児スタッフからボールを渡され、スタッフ「あそこにいれてよ」とボールプールを指さす。すると A 児は「ははは」と笑いながらボールプールに入れる。入れ終えると前を向きながら、A「もやっとゆき」と言う。
		有	A 児はお友達推理ゲームの紙を記入するためにイスに座っている。もうすでに書き終えた B 児がボールプールからボールを投げ始める。ボールかとんでくると、顔をあげ「雪だ！」と笑顔で言う。

Table 8　本研究で得られた結果

	対ペア相手	対非ペア相手	般化の有無
志向性	無→有	無→有	有
コミュニケーション手段	行動的→言語的	変化なし	無

いて、志向性の有無、行動的／言語的手段に分類されたエピソードの具体例を Table 5に示す。

⑵非ペア相手に対するコミュニケーション行動

A 児のコミュニケーション行動がペアだけでなく非ペアに対しても般化するのかを明らかにするため、非ペア相手に対するコミュニケーション行動に焦点を当て、コミュニケーション行動の手段と活動との関連を検討した。χ^2検定の結果、有意な関連は認められなかった（$\chi^2(2)=.24$, *n.s.*）。

さらに、コミュニケーション行動における志向性と活動レベルとの関連を検討するためにχ^2検定を行った。その結果、1%水準で有意な関連が認められた（$\chi^2(2)=9.37$, $p<.01$）。残差分析の結果、活動Ⅲにおいて志向性ありに分類されるコミュニケーション行動が期待値より有意に多いことが明らかとなった（Table 6）。また、各活動において、志向性の有無、行動的／言語的手段に分類されたエピソードの具体例を Table 7に示す。

Ⅳ．考察

⑴他者志向性

A 児のペア相手に対するコミュニケーション行動における志向性の変容に関しては、活動Ⅰでは志向性なしに分類されるコミュニケーション行動が多かったことに対し、活動Ⅲでは志向性ありに分類されるコミュニケーション行動が多い結果が得られた。一方、非ペア相手に対するコミュニケーション行動における志向性に関しては、活動Ⅲにおいて、志向性なしに分類されるコミュニケーション行動よりも志向性ありに分類されるコミュニケーション行動が多く生起することが明らかとなった。

これらのことから、A 児は活動Ⅰよりも活動Ⅲにおいて高い志向性が示され、さらにこの志向性の高さは、非ペア相手に対しても般化されたとみることができる。これらの結果より、「他者志向性ペア活動」を行うことにより、ペア相手のみならず非ペア相手に対しても志向性が高まるという仮説は支持されたといえる。

このような結果が得られた背景の1つには、A 児が、他者志向性ペア活動を通して、ペア相手への志向性が高まることによって、他者を志向しやすくなり、ペア相手のみならず、非ペア相手をも志向するようになったことが考えられる。他児の好みや特性などを自発的に言及することはあまりみられなかった A 児であったが、＃5（活動Ⅱ）において、一緒にマットに座っている他児がボールを触っている様子に対して、「H 君てボール好きだ」（Table 7：言語的カテゴリー）と言う場面がみられている。このような発言は、「他者志向性ペア活動」によって高まった他者への志向性が、ペア

相手だけでなく物理的に近くにいた非ペア相手に対しても向けられたことによると考えられる。

⑵コミュニケーション行動の手段

ペア相手に対するA児のコミュニケーション行動の手段は活動Ⅰでは身体的コミュニケーションが多く、活動Ⅱ、Ⅲでは相対的に言語的コミュニケーションが多いことが明らかとなり、活動を経るにしたがって身体的コミュニケーションから言語的コミュニケーションへと変化していったといえる。したがって、ペア相手に対しては、身体的なコミュニケーション行動は活動Ⅰで多く生起し、その後言語的なコミュニケーション行動が多く生起するという仮説は支持されたといえる。

活動Ⅰの内容は「足つなぎだるまさんが転んだゲーム」のように、ペアとの身体的距離が近く、A児が自分のペアを視覚的に認識しやすい環境であったこと、さらに、必ずしも言語的なコミュニケーションを用いる必要がなかったため、言語的コミュニケーション行動よりも身体的コミュニケーション行動が多く生起し、活動Ⅱ、Ⅲでは、身体的距離が遠い状態で、相手に指示したり、伝えるといった行動が求められたため言語的コミュニケーション行動が多く生起したと考えられる。これらのことから、A児のコミュニケーション行動の手段を変容させるにあたっては、対人的距離と、用いるコミュニケーション行動の手段という2つの視点から活動を設定することが妥当であったと考えることができる。

一方、非ペア相手に対しては、活動レベル間で身体的コミュニケーション行動、言語的コミュニケーション行動の生起頻度に有意差は認められなかった。したがって、非ペア相手に対しては仮説は支持されなかったといえる。

これらの結果から、A児のペア相手に対するコミュニケーション行動の手段における変容は、非ペア相手に対しては般化しないということが明らかになった。この理由の1つには、A児が、“受動群”であることが原因となっていると考えられる。A児の関わり方は受け身的であり、ペア相手の関わり方は活動によって、ある程度設定されており、A児に対する関わり方も自ずと言語的コミュニケーションが多くなったため、A児の言語的コミュニケーション行動が多く生起したと考えられる。しかし、非ペア相手の関わり方は、必ずしも活動として設定されたコミュニケーション行動を用いて関わらないため、活動内容に規定されず、A児のコミュニケーション行動が変容しなかったと考えられる。

⑶総合考察

本研究は、自閉性障害の男児1名を対象に、少人数のグループワークにおいて、主体的に他者へ志向するように設定した活動である、「他者志向性ペア活動」を行ない、その対人的行動の変容を検討することを目的とした。その結果、「他者志向性ペア活動」を行なうことによって、A児のコミュニケーション行動の変化が、他者への志向性の高まりとコミュニケーション行動の手段の変容という2つの側面から示された。

A児のコミュニケーション行動の相手と志向性の変化をまとめると、志向性の高まりやコミュニ

ケーション行動の変容が特定の他者相手にみられた後に、それ以外の相手に対しても変化していくことが示されている。つまり、他者への興味、関心といった志向性が高まればコミュニケーション行動が増加していくと考えることができる。したがって、コミュニケーション行動の増加や多様化を目指した支援を行う場合には、子どもにとってわかりやすい場面、用いやすいコミュニケーション行動手段が使えるような設定をし、徐々に範囲を広げていくことが重要となると考えられる。

このような活動内容や環境設定だけでなく、スタッフの関わり方も志向性を高める重要な要因であると考えられる。川村・大野（1998）は、コミュニケーション障害児との発達援助におけるスタッフの関わり行動の分析を行った。その中で「提案・勧誘・要求」「行為の予告」などの発信行動と「応諾」などの応答的行動の両方を用いることが、子どもとのやりとりを引き出し、維持する適切な関わりであること、そしてその行動を行うタイミングが重要であることを述べている。本研究においても、Table 5にみられた志向性なしのエピソードで、A 児は「2人1組になって座ってください」という全体指示では反応を示さず、他に注意が向いてしまっていたものの、その後、スタッフが再度 A 児に対して「誰とかな？」と個別指示をすることによって、A 児はペア相手である D 児を振り返り近づいた。この場面では、A 児にとって全体指示は注意が向きにくく、ペア相手を志向していない。そのような A に対し、「D 君とペアになるんだよ」という直接的な指示ではなく、他者への志向を促す指示によって A 児の自発的なペア相手への志向を引き出している。このような関わりは、川村ら（1998）の述べるタイミングを踏まえたかかわりであり、子どもの状態に応じた形で自発的な行動を引き出すために有効であると考えられる。したがって、今後の課題として、スタッフと子どもとのコミュニケーション行動に焦点を当て、どのような関わり方が子どもの志向性を高める上で重要となるのか検討する必要があるだろう。

さらに、本研究では、観察期間以降に日常生活における般化を検討するデザインを用いていないため、観察期間中にみられた A 児の行動がその後、どの程度定着したのかという点に関しては定かではない。したがって今後の課題として、コミュニケーション行動の変容だけでなく、その定着も視野に入れて検討していくことが必要となると考えられる。

【引用文献】

Baron-Cohen, S.（1989）The autistic children's theory of mind : A case of specific developmental delay. Journal of Child Psychology and Psychiatry, 30, 258-297

井澤信三（2000）発達障害生徒2事例におけるゲームスキルの獲得と直接指導していない社会的行動の生起との関連検討．発達障害研究, 22(1), 45-55.

次郎丸睦子・五十嵐一枝（2002）発達障害の臨床心理学 . 北大路書房

川村由紀・大野博之（1998）コミュニケーション障害児に対する関与者の関わり行動の分析 九州大学教育学部紀要（教育心理学部門）, 43(2), 211-225.

姜　信善（1999）社会的地位による幼児の仲間に対するコミュニケーション・スキルの差異―エントリー及びホスト場面からの検討― 教育心理学研究, 47, 440-450.

ローナ・ウィング．久保紘章・佐々木正美・清水康夫（訳）（1998）自閉症スペクトル―親と専門家のためのガイドブック― 東京書籍.

岡田 智・後藤 大士・上野 一彦（2005）ゲームを取り入れたソーシャルスキルの指導に関する事例研究，教育心理学研究，53, 565-578

Premack,D. and Woodruf,G.（1978）Does chimpanzee have a 'theory of mind'? Behavioral and Brain Science,4,515-526

高原朗子（2002）青年期の自閉症者に対する心理劇の効果 ?10年間の実践の検討 ?. 特殊教育学研究，40(4)，363-374.

滝吉美知香・小牧綾乃・和田美穂・田中真理（2005）高機能広汎性発達障害者における自己意識の発達(4)―青年期の高機能広汎性発達障害者における自己理解―．日本特殊教育学会第43回大会発表論文集，302.

田中真理・滝吉美知香（2005）グループワークを通した軽度発達障害児の他者への志向性(1)―高機能広汎性発達障害と診断された2事例を通して―．教育ネットワーク研究室年報，5，49-64.

涌井　恵（2003）発達障害児集団における集団随伴性による仲間相互交渉促進に関する条件分析 コミュニケーション障害学，20，63-73.

Wing L, and Gould, J（1979）Severe impairments of social interaction and associated abnormalities in children: Epidemiology and classification. Journal of Autism and Developmental Disorders. 9(1) 11-29

【謝辞】

本研究の執筆にあたりご協力をいただいた対象児のA君、ならびにご家族のみなさまに深謝いたします。

なお、この研究は、科学研究費補助金（基盤研究(B)課題番号19330209・研究代表者；田中真理）による。

Changing the communication behavior of an autistic child through "intentional pair activities directed at others" during group work

Susumu YOKOTA
(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)
Miho WADA
(Teacher, Ibaraki prefectural Kita-Ibaraki special educational school)
Michika TAKIYOSHI
(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University
／ Research Fellow of Japan Society for the Promotion of Science)
Mari TANAKA
(Associate Professor, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this study was to investigate the effectiveness of applying pair activities known as "intentional pair activities directed at others" constructed of three phases and conducted in small groups for a 12-year-3-months-old-boy with passive type autistic disorder. First, the communication behavior of the child was classified according to direction of intention, and then according to the presence of intention and method of communication.Results indicated that intention directed at not only the partner, but also other members was enhanced as a result of the activities. Furthermore, verbal communicational behavior of the child towards the partner increased. It is concluded that "intentional pair activities directed at others" should be available for children with autistic disorder in order to enhance their intentions directed at other people.

Key words：autistic disorder, group work, communicational behavior, intention